

オシヤレ心が支える凜とした姿

河合 久美子

九十一歳になる母はとてもおしゃれである。服装や身につけるものには人一倍のこだわりがある。幼いころから姉と私の服は全てお揃いで、彼女の手作りだった。オーバーコートからガウン、我々二人のウェディングドレスにお色直しのドレスに至るまで、自分でデザインし生地を選んで縫製するという、いわばオートクチュールである。小学生の頃の夏休みには、母が編んだ帽子を被り、姉と二人でお揃いのワンピースを着て旅行した。ピアノの発表会にはお気に入りのフリルのついたベージュのドレスを作ってくれた。高校時代の友人は、「あなたの披露宴の時の赤のシルクシャンタンのドレス、お母様の手作りでしょ。今でも覚えているわよ」と言ってくれる。手先が器用なだけでなく、その時々々の流行を取り入れ身体に完璧にフィットする服を着せてくれた。

今にして思うと、母は常に次につくる服のデザインや布地のことを考えていたのだろう。洋裁のみならず料理や茶道などにも熱心に取り組んでいたし、何でも吸収しようとする意欲も旺盛だった。自尊心と理想が高く、それだけに私たちに対する要求も常に高かった気がする。

そんな母を持ったことは幸せだと思う反面、面倒なこともある。介護ホームにお世話になっていて母を訪れる際の服装には必要以上に気を使う。見映えのしない服を着ようものなら、上から下まで目をやり、不機嫌な表情で不満を述べる。私はその辺を心得ているので合格点をもらうことが多いが、服装に無頓着な姉は常にお小言を頂戴している。

スカーフが好きな母は各種取り揃え、それらを服に合わせて使いまわしているが、ホームの中でも「おしゃれさん」で通っているようだ。

そんな母が父の十三回忌に着る服をどうしようかと、一カ月以上も前から気にかけて始めた。黒の喪服ならあるし、それ以外にも黒の衣服は沢山もっているはずだ。そ

れなのに、背中が曲がって腰がでっぱり、お腹も前に膨らんでいる体型になったので、それを上手く隠してくれる、すっぽりとかぶれるようなワンピースと上着がほしいと言い出した。私は父の法要に美しい姿を見せようという気持ちを微笑ましく思っていたが、実は孫たちに見苦しい姿をみせたくないというのが本音のようだ。姉と私は母の理想に合う服をあちこち探して回り、私はプラタン銀座でおしゃれな黒の薄手のワンピースを買い求めた。ちょっと母には若すぎる気もしたが、すっぽりかぶれるスタイルで素敵なので、これだと思ったのである。姉は姉で母の服を探し、お店に候補の服の取り置きをお願いした。店員さんに「うるさい母なので、気に入らない場合は購入しないこともあります」と付け加えることも忘れなかった。三月のある大雨の日、姉と二人で彼女をたまプラーザの東急にあるお店に連れて行き、そこで母の気に入る服を決めてもらうことにした。東急デパートの駐車場に車を停めて、二人で一階の受付まで母を連れて行き、そこで手配しておいた車いすを借りて店内を見て回った。姉は候補の服を母が気に入ってくれるかどうか、心配していたようだ。ここで決まらなないと、また探さなきゃいけない……。母の反応は一瞬でわかる。私が買った黒のワンピースは即座に却下されたものの、姉が選んだグレーのロングスカートと上着を試着したところ、母はとっても気に入ったようだ。お腹と背中のでっぱりをうまい具合にカバーしてくれるプリーツで、優雅な奥様風に見せてくれる。新しい服を試着するときの母の顔は幸せいっぱいだった。グレーのワンピースを買い求めて、今度はワコールで下着を探す。ボディースーツじゃないと、身体がしゃんとしないという。既に登録してあるサイズのボディースーツと肌着を数点購入した。

数か月前だが母はろっ骨を六本も骨折する大けがをして、三週間もベッドで絶対安静の状態が続いた。その間もサンダーソンの柄のお気に入りのパジャマしか着ないと言いつ張り我々を困らせた。もう一つサンダーソンのパジャマを購入して何とか事なきを得たが、診察のときもおしゃれを忘れないというのにはいささか参った。しかし、ここまで歩けるほど回復したのは、このおしゃれ心のお蔭ではないだろうか。介護ホームでは共同生活をする一つの社会であり、常に自分をさらけ出す場である。お風呂も共同だから、きれいな下着を身に着けようと思うだろうし、診察の際に気に入らないパジャマを着ることなど彼女の自尊心が許さない。こういった気持ちだが、彼女の毎日にハリを与え支えているのだろう。

私たちは母を自分の将来の姿と捉えて、今後の糧としている。認知症やうつを患うことなく、俳句をつくって日々の想いをしたためる感性を持つ母を頼もしく思う。子供が成長し元気に過ごす姿を見るのが親にとって一番の幸せであるように、子供にとって親が元気で毎日を生き生きと生活しているのはこの上ない喜びである。おしゃれ心を忘れず、前向きな姿を子供に示すことこそが、子供に対する大きな愛情の証なのだろう。

河合 久美子

津田塾大学学芸学部英文学科卒業、ニューヨーク大学大学院修士課程修了
外資系金融機関にて永年にわたりリサーチ部門勤務の後、現在はフリー記者。

著書

『 FINE DINING IN A BOX、 - The world of Kyoto bento. (Amazon.com) 』

翻訳書

「コードネームはナイチンゲール (創元社)」